



小さな
決め事



川崎ゆきお

「暑いですなあ」

「梅雨前のこの時期が、一番暑く感じるかもしれませんねえ。まだ、暑さ慣れしていない」

「暑さに慣れるものでしょうか」

「慣れません」

「あ、そう」

「自転車でこうして昼間うろうろするのは、そろそろ控えないと、いけません」

「まだ猛暑で熱中症云々ってニュースは聞きませんがね」

「いやいや、もう十分体に暑けが入りますよ」

「じゃ、水分の補強が大事だと」

「私は自販機で買うようにしています。これが楽しみでしてねえ」

「あ、そう」

「水分の補給なんてあなた、喉が渴けば何か飲みますよ」

「そうですか、僕は飲み終えたペットボトルの小さなやつですがね、あれにお茶を入れてあります」

「水筒ですなあ」

「お茶ですが、まあ、水筒です。まだ麦茶を冷やす時期じゃないので、普通の緑茶です」

「私も最初はそれにしようと思ったのですがね。緑茶は自販機で買って、それを持ち帰っています。捨てないでね。これに家のお茶を入れようと。しかし実行しておりません」

「ほう、なぜでしょうか」

「喉が渴いたときに自販機を探します。一番近くにある自販機と決めています」

「決め事は大事ですからねえ」

「そうです。そしてその前で買うのですが、選択は自由です。自販機により、入っている物が違うでしょ。三十円ほど違ったりしますがね。まあ、その中で選ぶのですが、日により変えています。決して昨日と同じ物にしないと」

「決め事は大事ですからねえ」

「そうです。偶然同じ自販機の前に立つこともあります。やはり好みはあるんでしょうねえ。しかし、同じ物は買わない。これはですねえ、昨日と同じじゃなければいいのであって、まあ、たいがいはお茶にしていますよ。しかし、お茶の種類も多いですからねえ。同じ緑茶でも味が違う。メーカーによってね」

「僕は家内がお茶を入れるものだから、ずっと同じですよ。葉が切れるまで」

「そうですよ。やはり日々変化が欲しい。だから、その変化を望むのなら、変化が起こるような決め事が必要なんですよ」

「決め事は大事ですからねえ」

「だから、私の場合、毎日買う自販機が違う。当然喉が乾いていないときは、買わなくてもいい。つつい習慣で買ってしまいそうなのですが、これは決め事に反します。あくまでも喉が渴いたときに限られます」

「はいはい、やはり決め事は大事ですねえ」

「私の場合、満遍なく行き渡るような決め事になるよう心がけています」

「はい、参考になりました」

「ただ」

「何ですか」

「お茶代がかかります」

「自販機でお茶を買う程度なら、知れているでしょ」

「一ヶ月で三千円を超えます」

「ああ、ちりも積もればですね」

「三千円あれば、何が買えるのかと想像すると、やはり家から持ち出したお茶の方が好ましい」

「そうですね。だから僕はそうしているのです」

「しかし、変化が欲しい」

「はいはい」

「しかし、自販機でお茶を買ってもよろしいという決め事をしています。だから、問題はないのです」

「決め事は大事ですからねえ」

「そうです」

「それだけですか」

「そうです」

了